第 127 回　東方問題①

1　オスマン帝国の衰退

・超大国であった（　　）は、18 世紀ころから徐々に衰退を始めた。
　→オスマン帝国内の諸民族が、独立運動を盛んに行うようになった。
・また（　　）は、（　　）を求めて南下政策を行っていた。
・これらのことに、ヨーロッパ諸国が積極的に介入して起こった国際問題を、「　　」という。

・1683 年、オスマン帝国は第 2 次ウィーン包囲を行うが、大失敗に終わった。
　→1699 年、（　　）により、オスマン帝国はオーストリアに（　　）やトランシルヴァニアを奪われるなど、広大な領土を失った。
　→1774 年、キュチュク=カイナルジ条約により、ロシアに黒海の支配権を奪われた。
・国内では（　　）と呼ばれる徴税請負で経済力を持った地方有力者が自立化するなど、オスマン帝国は徐々に衰退と混乱の時代に入っていった。

◆セリム 3 世（在位 1789～1807 年）
・衰退をくいとめるため西洋近代化を進めたが、保守派の暴動で殺された。
◆マフムト 2 世（在位 1808～1839 年）
・形骸化した（　　）を解散させ、西洋近代化を進めようとした。

私の研究テーマ。彼が行った第2次ウィーン包囲の失敗が、衰退のはじまりでした。まあ入試には出ない人です。

カラ=ムスタファ=パシャ

ニザーム=ジェディットという、新しい西洋式の軍隊を創設するなどしたが、保守派の反乱によって殺された。

セリム3世

「セリム1世の再来」と呼ばれ、激しい性格だった。オスマンの啓蒙専制君主と言われることも。

マフムト2世

かつて世界最強であったイェニチェリ軍団も世襲が進み、単なる特権階級と化していた。

イェニチェリ

ムハンマド=アリー
マケドニア出身のアルバニア人らしい。
ある歴史家は、「19 世紀前半のエジプト史は、この男ひとりの物語である」と書いた。

＜　　＞
・オスマン帝国の領土だったが、（　　）の遠征で混乱した。
　→総督の（　　）は、オスマン帝国から事実上独立した。

＜アラビア半島のアラブ復興＞
・メッカで結成されたサヌーシー教団は、リビアに拠点をうつして自立した。
・18 世紀半ば、イブン=アブドゥル=ワッハーブがムハンマドの教えに戻るイスラーム改革運動を行い、彼らは（　　）と呼ばれた。
　→アラビアの豪族（　　）と組んで（　　）を建国した。
　→1818 年、ムハンマド=アリーによって一時滅ぼされた。
　→1823 年にサウード家がリヤドを拠点に再興し、19 世紀末まで存続した。

2　ギリシア独立戦争と国際関係

・1821 年、（　　）が起こった。
　→ロシア・イギリス・フランスは、世論の高まりや東地中海への進出を理由として、ギリシアの独立を支援した。

≪結果≫
・1829 年、アドリアノープル条約で（　　）と（　　）を、全ての船が自由に通行できるようになった。
・1830 年、ロンドン会議で、ギリシアの独立が正式に承認された。

ボスフォラス海峡

イスタンブルは、町の真ん中でアジアとヨーロッパに分かれている。私はヨーロッパ側の自宅からアジア側の大学院へ、毎日ボスフォラス海峡を渡って通学していました。

ダーダネルス海峡

黒海から南下し、ボスフォラス海峡を通過すると、次はこの海峡に達する。
ここを抜ければもうエーゲ海、そして地中海へとつながっていく。

3　エジプト=トルコ戦争と国際関係

・エジプト総督ムハンマド=アリーは、旧勢力の（　　）を一掃し、フランスの支援で近代的な軍の創設、造船所の建設、綿花の栽培などを進めた。

・1831 年、ギリシア独立戦争の際にオスマン帝国を支援したムハンマド=アリーが、オスマン帝国に対してシリアの統治権を要求した。
　→（　　）が発生し、ヨーロッパ諸国が介入した。
　→1833 年、オスマン帝国を支援したロシアは（　　）を獲得した。
　→イギリスとフランスは、これに猛反発した。

・1839 年、ムハンマド=アリーが、エジプトとシリアの世襲化を要求した。
　→再びエジプト=トルコ戦争（第２次）が始まった。
　→1840 年に再び（　　）が開かれてロンドン４国条約が結ばれた。
≪結果≫
・ムハンマド=アリーはシリアをあきらめさせられ、エジプトとスーダンのみ世襲化した。
・ボスフォラス海峡とダーダネルス海峡を、外国軍艦が航行することは禁止となった。